

平成30年2月金子医院月報

1月から今もそうですが、寒い日が続いています。大雪の日がありましたね。あまりの積雪に、職員の帰宅を心配し、17時で切り上げさせていただきました。ご迷惑をおかけしたかもしれません。申し訳ございませんでした。それでも自宅まで2時間かけて帰ったとのことでした。知人宅にとまったものや、車中泊したつわものもいたようですが、雪はなめてはいけません。やはり備えと、早めの判断が大切ですよ。次の日の朝



は歩いて出勤したのですが、金子医院が雪化粧できれいだったこと、とうはらスタッフがいつもと変わらず出勤して朝食を食べさせていてくれたことに感謝でした。



1年ほど前から、警察の検案医というものを仰せつかり、死因不明の、しかし事件性のないと思われるご遺体の検視を行っています。月に3回くらい電話がかかってきて、警察署あるいはご自宅へ赴き、死因を特定するというものです。パトカーが自宅に来てしまうので、近所では私が何回か逮捕されているらしいということになっているようですが。車中では、警察官はあまり余計なことは話してはいけならしく、その件はよくわかりませんというような会話になりがちで、会話は湿りがち。私たち医師は検視の仕方を実は教わったことはなく、臨床経験から推定するしかないのが現状で、いつもこれでよかったのか？という気がしています。海外ではほぼすべてのケースで解剖が実施され、警察ではなく専門の機関が死因を科学的に特定するという体制がとられています。韓国にも最近大きな解剖センターができて、ドラマにもなっていますよね。ご遺体を解剖するという文化がないというのがありますが、世界的には警察と臨床医で解剖せずに検案する国は日本と中国くらいという話を聞いたことがあります。しかし日本には現状法医学を修めた医者は各県に数えるほどしかいません。いつこのような体制ができるのか、想像もできません。事件性のないことを扱わざるを得ない警察官と、法医学専門ではない開業医の困難なケースは、高齢化の中でもっと増えていきそうです。